青年招へい事業

アジア・太平洋・アフリカ諸国

[交流レポート]

1996

国際協力事業団

JICA LIBRARY
J 1133042 (0)

研青
JR
96-29

1133042 (0)

開講と歓迎への熱い想

平成8年度ケアメクルー太平洋ツアー参加青年招へい事業

開講式

国際協力事業団より歓迎のあいさつ

期待に胸をふくらませて

歓迎のあいさつに拍手を送る青年たち

真剣にあいさつを聞く参加青年

どんな1カ月になるのかしら?

共通プログラム

武道の体験

真剣に講義を聴く青年

一日、日本人参加者と交流(体験的日本語学習)

玄関に入るときはくつを脱いで、「おじゃします」。(日本語学習)

どこに行きましょうか?(体験的日本語学習)

分野別都内プログラム

真剣なあまり質問も出ました。

日本文化体験

フーフー(人工呼吸の体験)

防災館にて消防体験

市場の視察

バンブーダンスを披露

合宿セミナー

楽しい思いを込めて

できた!

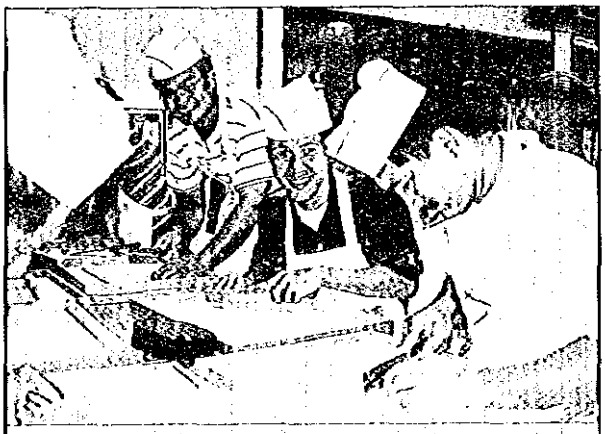
夜おそくまで語り合う青年たち

おいしそうですね。

踊りを披露

分野別地方プログラム

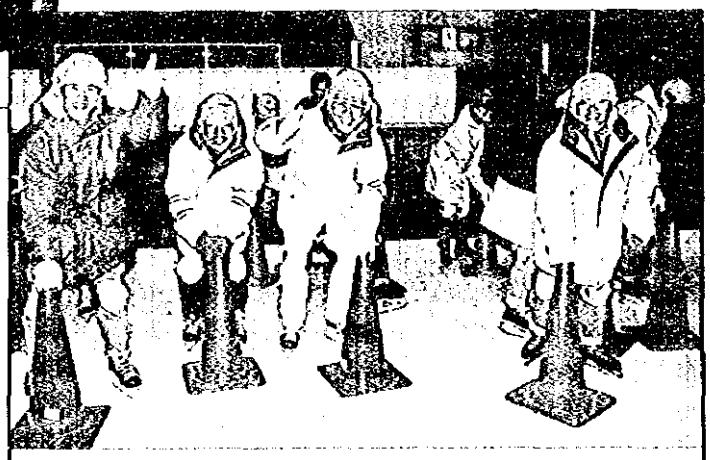
上手ですね。



はやく食べたいです。

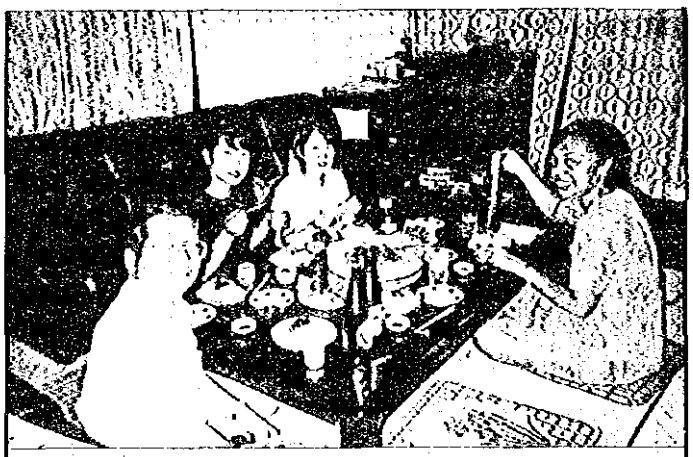
美しい着物姿

熱心に本を見る青年



とても楽しいです。

ホームステイ



日本様式にてみんなで夕食

お花のおれに

ホームステイ先の家族と

サリーを着て記念写真

はい、笑って…

見学旅行

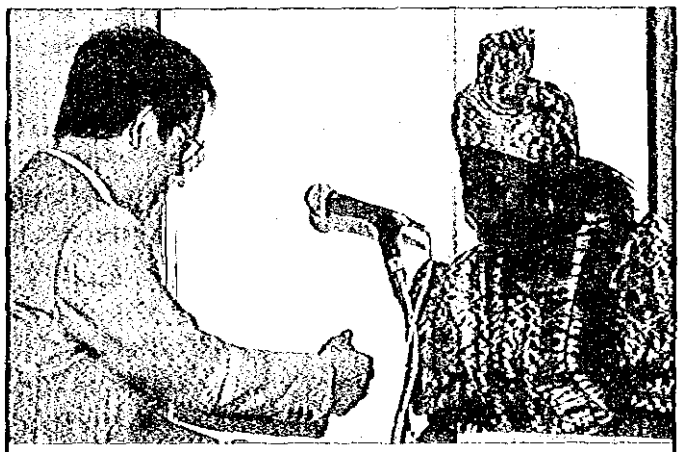
金閣寺を背にして

清水寺にて

広島平和記念公園

日本三景の一つ、宮島にて

歓送会



国際協力事業団から参加証の授与

招へい青年代表のあいさつ

あでやかな踊り

迫力ある歌声

1カ月の思いを込めて

青年招へい事業

はじめに

「青年招へい事業」は、国際協力事業団（JICA）が開発途上国を対象に実施する技術協力の一環として、アセアンをはじめ、アジア、太平洋、アフリカ諸国などから、将来の国造りを担う青年を、専門分野別に１カ月間招へいし、それぞれの分野について学ぶとともに、ホームステイ受入家族などとの幅広い交流を通じて相互理解を深め、信頼と友情を築くことを目的としています。

昭和59年度より平成７年度までの12年間で、日本を訪問したアジア・太平洋・アフリカ諸国の青年は13,454名に達しました。招へい国は当初アセアン６カ国でしたが、現在では太平洋諸国・地域、ミャンマー、中国、韓国、南西アジア諸国、モンゴル、アフリカ諸国、およびカンボディア、ラオス、ヴィエトナムのインドシナ３国が加わり大きな広がりをもってまいりました。

そして本事業開始以来13年目を迎えた平成８年度も、1,555名の青年の受け入れを無事終了することができました。これはひとえに、関係各方面の皆様のご協力と温かいご支援によるものと、心からお礼申し上げます。

本報告書は、招へい青年、合宿セミナーに参加した日本青年およびホームステイを引き受けていただいた全国の家庭の皆様から寄せられた感想文を中心に、招へい青年の１カ月の滞在記録をとりまとめたものです。本報告書が本事業のさらなる発展の指針となり、また皆様の良き思い出の一助となれば幸いです。

なお、本報告書は今年度の全招へい青年および各国の関係者にも送付させていただく予定です。

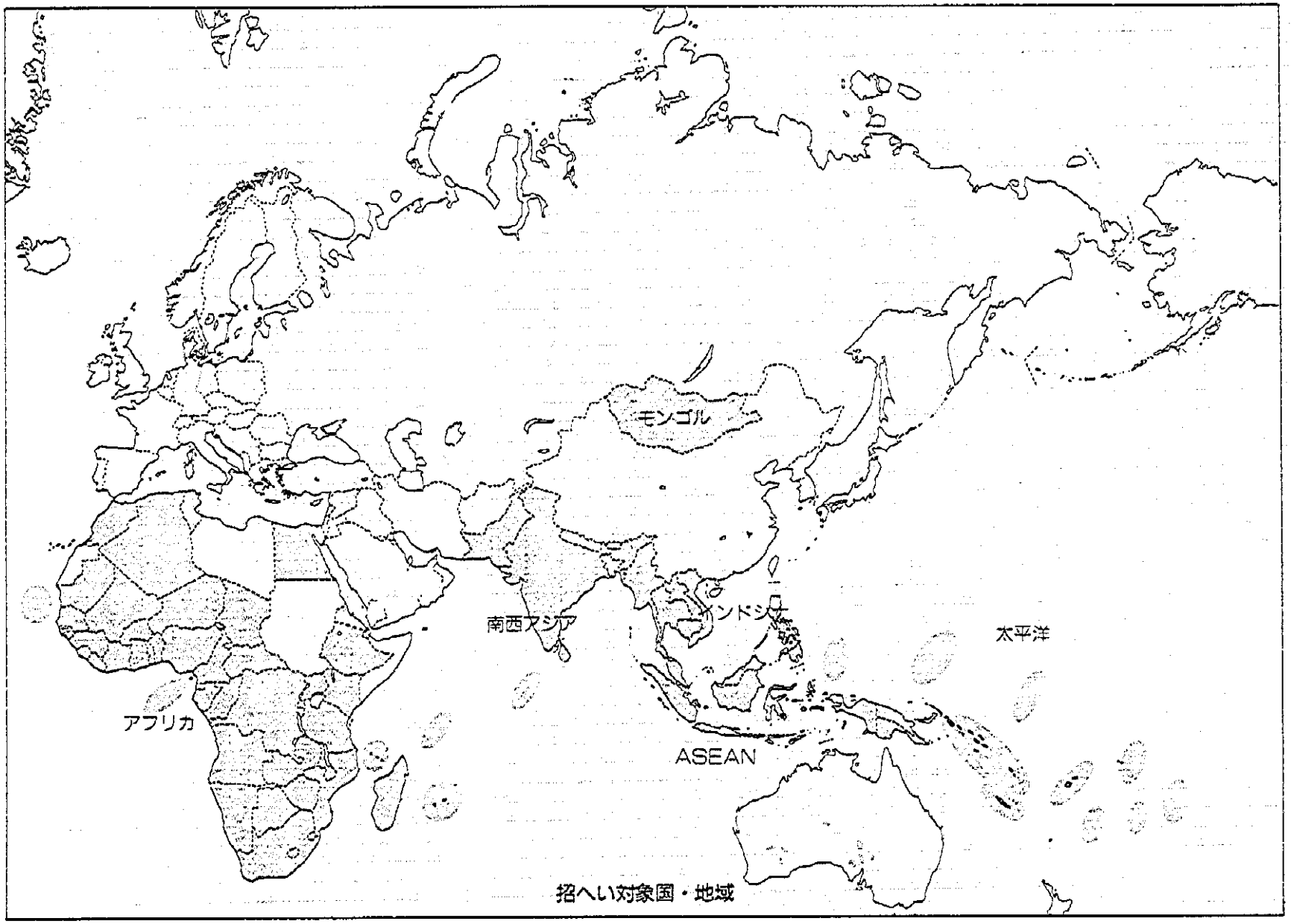
最後となりましたが、心温まるご感想、ご意見をお寄せいただいた皆様ならびに関係者の方々に重ねて厚くお礼申し上げますとともに、「青年招へい事業」がさらに有意義な交流プログラムとなりますよう、今後ともご支援、ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

平成９年３月

国際協力事業団
研修事業部
部長　森本　勝

目　次

はじめに
1．青年招へい事業―アジア・太平洋・アフリカ諸国―
(1) 計画の概要……7
(2) 平成8年度青年招へい実績一覧 ……12
(3) 青年招へい事業　国別年度別受け入れ実績 ……14
2．招へい青年の印象
アジア
ブルネイ……17
インドネシア……20
マレイシア……26
フィリピン……33
シンガポール……39
タイ……45
バングラデシュ……51
ブータン……52
インド……53
モルディヴ……54
ネパール……54
パキスタン……55
スリ・ランカ……56
モンゴル……57
ミャンマー……59
カンボディア……60
ラオス……61
ヴィエトナム……62
太平洋諸国・地域
クック諸島……66
フィジー……67
パプア・ニューギニア……68
ソロモン諸島……70
アフリカ
アルジェリア……71
ベナン……72
エジプト……73
スワジランド……74
3、合宿セミナー参加日本青年の声……77
4、ホストファミリーの思い出……89
JICA関係機関連絡先……103
〈招へい青年名簿〉



招へい対象国・地域

1. 青年招へい事業
アジア・太平洋・アフリカ諸国

(1) 計画の概要

1) 目 的

青年招へい事業は国際協力事業団（JICA）が開発途上国を対象に実施する技術協力の一環として、これら諸国の未来の国造りを担う青年を専門分野別に１カ月間わが国に招へいし、それぞれの分野について学ぶとともに、これらの参加青年が日本の同世代の青年との交流を通じ相互理解を深め真の友情と信頼を培うことを目的とする。

2) 招へい事業

(a) 実施方法

a） 招へい人数

平成８年度は、ASEAN６カ国より各150名（ブルネイは50名）の800名、ミャンマー20名、パプア・ニューギニア、フィジーをはじめとする太平洋14カ国・地域より計90名、インド、パキスタンをはじめとする南西アジア７カ国より100名、モンゴルより10名、アフリカ諸国44カ国・１国際機関より100名、ヴィエトナムより100名、カンボディアより30名、ラオスより20名の合計1,270名を招へいする。

b） 招へい対象者

下記分野における指導的立場にある18～35歳の青年。

ア， ASEAN諸国

(i) 国別グループ

経済A（マレイシアは経済経営）：経済官庁公務員、貿易実務関係者、経済学専攻の学生等

経済B（マレイシアは中小企業）：中小企業等産業関連の青年労働者（マレイシアは産業関係の技術研究開発従事者も含む）

教育：教員、教育行政公務員、教育学専攻の学生、文化・スポーツ関係者

社会開発：青少年事業の活動者、地域振興・観光開発関係者、社会開発に従事する公務員等、社会学専攻の学生

（マレイシアは科学技術開発：科学技術開発関係公務員、科学技術開発分野専攻の学生）

農業（マレイシアは農業開発）：林業・水産を含む農業従事者、農業団体職員、農業関係公務員、農学専攻の学生等

(ii) 混成グループ

環境保全：環境行政公務員、環境保全関連実務者

社会福祉：社会福祉公務員、社会福祉学専攻の学生、社会奉仕関係者

保健医療：医師・看護婦等医療従事者、医学専攻の学生

行政B：運輸・交通関係公務員

経済：エコノミスト、貿易実務関係者

教育：教員、教育学専攻の学生、教育関係者

イ．太平洋諸国・地域、南西アジア諸国、モンゴル

公務員：他の分野に該当しない一般公務員

教員：教育機関教員、教育関係公務員

教育：教員、教育学専攻の学生、教育関係者

保健医療：看護婦

ウ．アフリカ

教員：高等学校もしくは中学校の女性教員

公務員：経済開発関係公務員

エ．ミャンマー

教育：小中高等学校教員、教育省の教員養成校の講師

オ．ヴィエトナム

公務員：司法、立法、行政、特に地方公務員を含む公共サービスや国際協力に従事する者

経済：工業・建設・商業・雇用サービス・観光・交通・資源開発・環境等の分野に従事する者

農業：農林業従事者、農林業団体職員、農林業関係公務員、農学・林学専攻の学生等

教育：小中高等学校・職業訓練校の教員、教育行政・社会福祉・社会教育に従事する公務員、教育・社会福祉・伝統文化等の保護・報道分野の研究者や学生

カ．カンボディア

教育：小中高等学校教員、教育関係公務員

キ．ラオス

教育：小中高等学校教員、教育関係公務員、教育専攻の学生

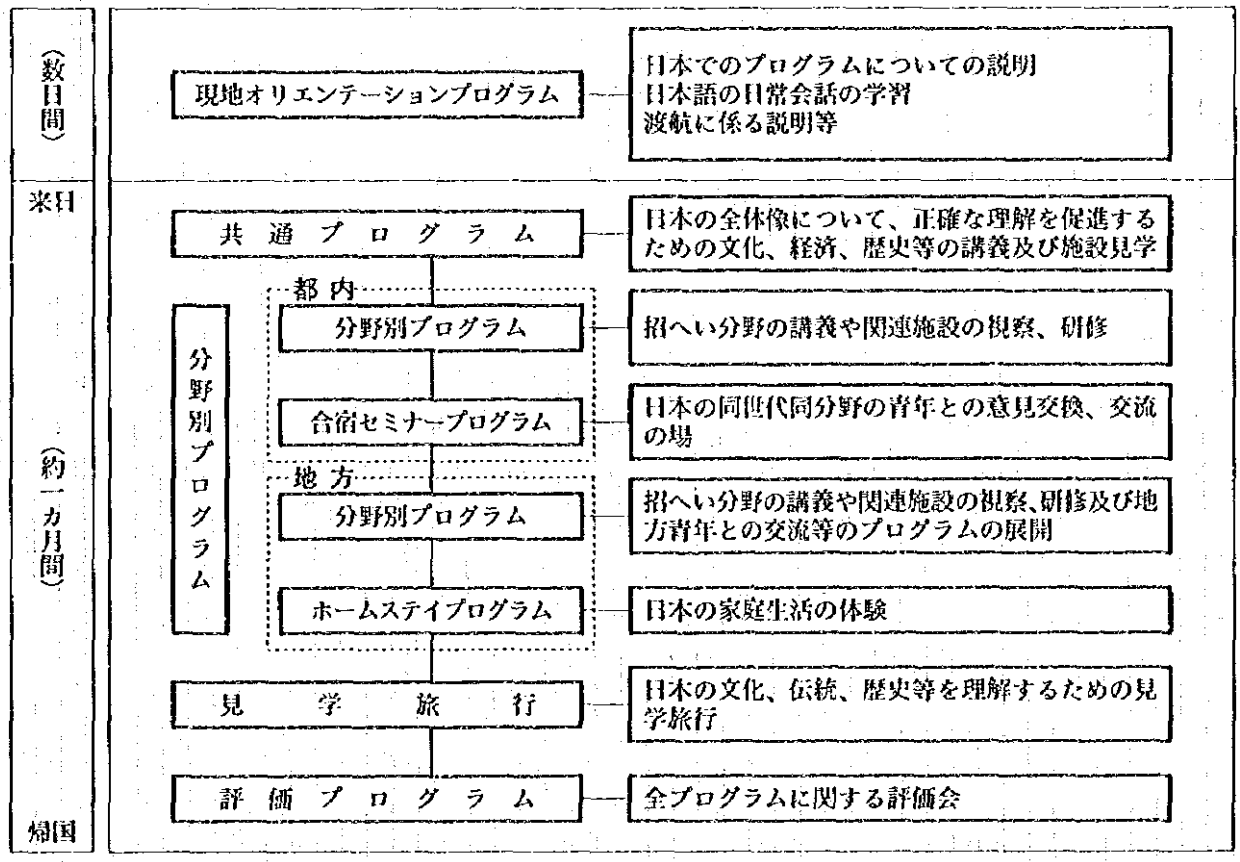
c） 招へい期間

約1カ月。出発前、数日間の現地オリエンテーションプログラムを実施。

d） 受け入れ時期

1996年5月中旬から1996年12月中旬

(b) プログラム概要



3) アフターケアー事業

「青年招へい事業」により日本に招へいした青年が、帰国後も対日理解を増進し、日本の同世代の青年たちと友情を持続させるよう、青年の帰国後、以下のアフターケアー事業を実施している。

(a) 文献供与

帰国青年に対し、日本でのプログラム内容をとりまとめた「交流レポート」や青年招へい事業広報誌"Dear Friends"などの送付を行い、帰国後も対日理解が継続されるよう、情報提供を実施している。

(b) 各国同窓会の設立

各国の帰国青年によって構成される同窓会設立を促進し、同窓会名簿の作成、新規招へい青年の現地プログラムへの協力、帰国青年のための総会及び会報作成等の活動を同窓会が主体的に実施するにあたり、所要経費負担をするなど側面的支援を行っている。ブルネイ、インドネシア、マレイシア、フィリピン、シンガポール及びタイではすでに同窓会が設立され、パプア・ニューギニアその他の太平洋諸国・地域や南西アジア諸国においては、準備中あるいはその機運が盛り上がっている。

(c) 同窓会交流連絡会

各国の同窓会の連携を図ることによって、各国同窓会活動を充実し、日本の招へい事業の効果を継続的、多角的に発展させるため、各国同窓会が一堂に会して交流連絡会を開催するにあたり、日本側は旅費等の経費面で支援するとともに、日本側代表者を派遣し、各国代表者との包括的な意見交換等を行っ

ている。なお交流連絡会は、現在のところ、同窓会が設立されているASEAN諸国間で行われており、1988年に第1回連絡会がインドネシアで開催され、その後、毎年各国持ち回りで実施されている。

(d) アフターケアー・チームの派遣

各国青年の招へいに中心的役割を果たした受入関係者である交流青年、ホストファミリー、関係機関担当者から構成される日本青年団を各国に派遣することによって、帰国青年の日本理解をフォローアップするとともに、受入関係者が各国の実態を把握することによって、より効果的なプログラム策定に役立てる。また、これらアフターケアー・チームの派遣により、片側通行であった交流事業を相互に発展・拡充させ、一層の信頼と友情を深める。今年度もASEAN諸国及び中国に7グループ34名が派遣された。

(2) 平成8年度青年招へい実績一覧

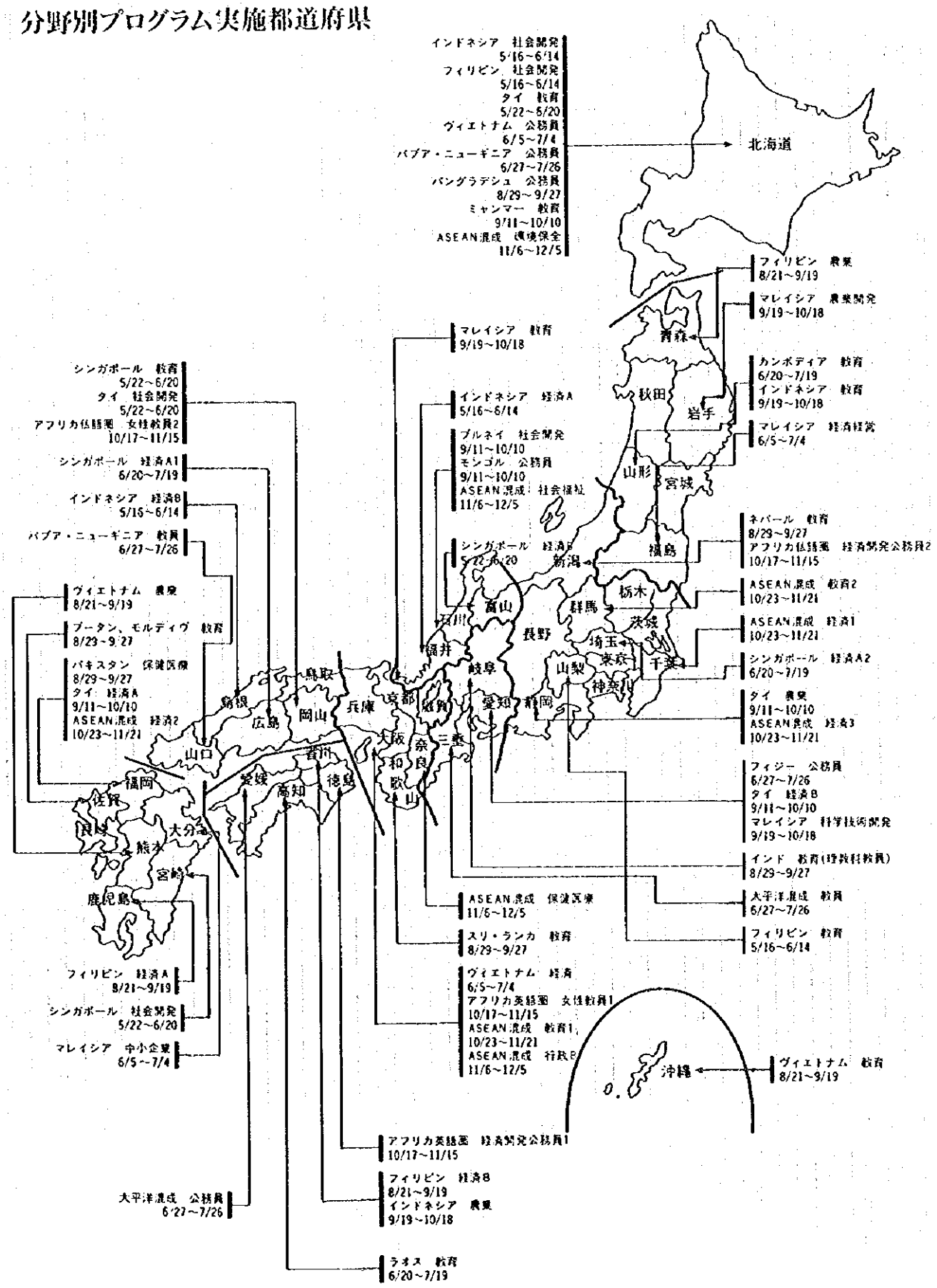
受入時期 陣・人数	国名	分野名	人数	実施協力団体	実施県	地方団体
5月16日～6月14日 1陣 116人	インドネシア	社会開発	25	日本ユースホステル協会	北海道	千歳国際交流協会
	インドネシア	経済A	20	日本経済青年協議会	福井	(財)福井県国際交流協会
	インドネシア	経済B	24	勤労厚生協会	島根	島根県国際交流青友会
	フィリピン	教育	22	青少年育成国民会議	山梨	(社)青少年育成山梨県民会議
	フィリピン	社会開発	25	青年海外協力協会	北海道	青年海外協力隊北海道OB会道東支部
5月22日～6月20日 2陣 118人	シンガポール	教育	22	世界青少年交流協会	岡山	岡山県世界青年友の会
	シンガポール	社会開発	25	ユースワーカー能力開発協会	宮崎	ユースワーカー能力開発協会宮崎県支部
	シンガポール	経済B	24	国際交流サービス協会	富山	(財)とやま国際センター
	タイ	教育	22	青少年育成国民会議	北海道	(財)北海道YMCA
	タイ	社会開発	25	日本友愛青年協会	岡山	(財)岡山県青年館
6月5日～7月4日 3陣 99人	ヴィエトナム	公務員	25	公務研修協議会	北海道	とまこまい国際交流センター
	ヴィエトナム	経済	24	勤労厚生協会	大阪	(財)太平洋人材交流センター
	マレイシア	経済経営	25	世界青少年交流協会	福島	福島県青年海外派遣友の会
	マレイシア	中小企業	25	日本ユースホステル協会	大分	大分県海外協会
6月20日～7月19日 4陣 92人	シンガポール	経済A1	20	ユースワーカー能力開発協会	広島	しょうばら国際交流協会
	シンガポール	経済A2	24	日本経済青年協議会	埼玉	上尾市国際交流協会
	カンボディア	教育	30	青少年育成国民会議	山形	(財)山形県国際交流協会
	ラオス	教育	18	国際交流サービス協会	高知	(財)高知県国際交流協会
6月27日～7月26日 5陣 89人	太平洋混成	公務員	24	青年海外協力協会	愛媛	愛媛県青年海外協力協会
	太平洋混成	教員	23	日本国際生活体験協会	三重	(財)三重県国際交流財団
	パプア・ニューギニア	公務員	10	世界青少年交流協会	北海道	(社)北海道子ども会育成連合会
	パプア・ニューギニア	教員	20	日本国際協力センター	山口	山口県青年団体連絡協議会
	フィジー	公務員	12	愛知県国際交流協会	愛知	(財)愛知県国際交流協会
7月3日～8月1日 6陣 100人	韓国	青年指導者・公務員	25	日本ユースホステル協会	愛媛	(財)愛媛県国際交流協会
	韓国	勤労青年(公務員)	25	勤労厚生協会	滋賀	滋賀県青年団体連合会
	韓国	教員(幼稚園)	25	国際交流サービス協会	茨城	平成8年度茨城県外国青年招へい事業実行委員会
	韓国	学生(農水科系)	25	世界青少年交流協会	秋田	(財)秋田県国際交流協会
8月21日～9月19日 7陣 119人	ヴィエトナム	教育	25	ユースワーカー能力開発協会	沖縄	(財)沖縄県国際交流財団
	ヴィエトナム	農業	25	青年海外協力協会	熊本	熊本県青年海外協力協会
	フィリピン	経済A	20	日本ユースホステル協会	鹿児島	(財)鹿児島県国際交流協会
	フィリピン	経済B	24	日本経済青年協議会	香川	(財)香川県国際交流協会
	フィリピン	農業	25	世界青少年交流協会	青森	青森県青年海外協力協会
8月29日～9月27日 8陣 97人	バングラデシュ	公務員	20	青年海外協力協会	北海道	青年海外協力隊北海道OB会道東支部
	ブータン、モルディヴ	教育	10	日本ユネスコ協会連盟	佐賀	佐賀ユネスコ協会
	インド	教員(理数科系)	27	世界青少年交流協会	岐阜	岐阜県世界青年友の会
	ネパール	教育	10	日本国際協力センター	新潟	(財)新潟県国際交流協会
	スリ・ランカ	教育	10	青少年育成国民会議	和歌山	(社)和歌山県青少年育成協会
	パキスタン	保健医療	20	国際看護交流協会	福岡	(財)国際看護交流協会

受入時期 陣・人数	国　名	分野名	人数	実施協力団体	実施県	地方団体
9月11日 ～ 10月10日 9陣 115人	タ　イ	農業	25	青年海外協力協会	静　岡	沼津国際交流協会
	タ　イ	経済A	20	日本国際協力センター	福　岡	福岡県海外青年招へい事業実行委員会
	タ　イ	経済B	24	勤労厚生協会	愛　知	ジャパンヤングサークル東海支部
	ブルネイ	社会開発	16	日本ユースホステル協会	石　川	(財)石川県ユース・ホステル協会
	ミャンマー	教育	20	青少年育成国民会議	北海道	青年海外協力隊北海道OB会
	モンゴル	公務員	10	国際交流サービス協会	石　川	金沢国際交流財団
9月19日 ～ 10月18日 10陣 113人	マレイシア	農業開発	16	青年海外協力協会	岩　手	(財)岩手県国際交流協会
	マレイシア	教育	25	日本国際生活体験協会	京　都	(社)青年海外協力協会近畿支部
	マレイシア	科学技術開発	25	豊川市国際交流協会	愛　知	(財)豊川市国際交流協会
	インドネシア	農業	25	世界青少年交流協会	香　川	香川県海外派遣友の会
	インドネシア	教育	22	日本国際協力センター	山　形	山形県青年海外協力協会
10月2日 ～ 10月31日 11陣 100人	中　国	青年指導者	25	日本ユースホステル協会	宮　城	宮城県ユース・ホステル協会
	中　国	経済青年	25	日本経済青年協議会	長　崎	長崎県世界青年友の会
	中　国	公務員	25	ユースワーカー能力開発協会	福　井	武生市国際交流協会
	中　国	教員	25	日本国際協力センター	兵　庫	(財)兵庫県青少年本部
10月17日 ～ 11月15日 12陣 95人	アフリカ					
	英語圏	女性教員1	28	大阪府国際交流財団	大　阪	(財)大阪府国際交流財団
	仏語圏	女性教員2	22	青年海外協力協会	岡　山	津山と世界を結ぶ会
	英語圏	経済開発 公務員1	23	国際交流サービス協会	徳　島	徳島県青年海外派遣の会
	仏語圏	経済開発 公務員2	22	世界青少年交流協会	新　潟	新潟県世界青年友の会
10月23日 ～ 11月21日 13陣 88人	ASEAN混成	教育1	18	大阪府国際交流財団	大　阪	(財)大阪府国際交流財団
	ASEAN混成	教育2	17	日本国際生活体験協会	群　馬	(財)群馬県国際交流協会
	ASEAN混成	経済1	18	日本国際協力センター	千　葉	(財)千葉県国際交流協会
	ASEAN混成	経済2	18	青少年育成国民会議	福　岡	(社)九州・山口経済連合会
	ASEAN混成	経済3	17	勤労厚生協会	静　岡	(財)静岡県国際交流協会
11月6日 ～ 12月5日 14陣 114人	ASEAN混成	環境保全	30	日本経済青年協議会	北海道	釧路市海外青年招へい事業実行委員会
	ASEAN混成	社会福祉	30	日本ユースホステル協会	石　川	小松市国際交流協会
	ASEAN混成	保健医療	30	国際看護交流協会	奈　良	(財)国際看護交流協会
	ASEAN混成	行政B	24	国際交流サービス協会	大　阪	大阪府青少年活動財団
11月13日 ～ 12月12日 15陣 100人	中　国	産業基盤整備	25	世界青少年交流協会	山　口	世界青年徳山友の会
	中　国	経済開発	25	勤労厚生協会	栃　木	栃木県外国青年招へい事業実行委員会
	中　国	地域振興	25	日本国際協力センター	鳥　取	とっとり青友会
	中　国	人材育成	25	青年海外協力協会	沖　縄	(社)沖縄県青少年育成県民会議
合　計	70グループ 1,555人	ASEAN 6カ国（797）、太平洋14カ国・地域（89）、ミャンマー（20）、中国（200）、韓国（100）、南西アジア諸国7カ国（97）、モンゴル（10）、アフリカ諸国38カ国1国際機関（95）、カンボディア（30）、ラオス（18）、ヴィエトナム（99）計72カ国・地域、1国際機関				

(3) 青年招へい事業　国別年度別受け入れ実績

国名＼年度	昭和59	昭和60	昭和61	昭和62	昭和63	平成元	平成2	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	合計
インドネシア	149	150	150	150	150	149	150	149	147	149	145	150	149	1,937
マレイシア	147	148	150	150	150	150	150	150	150	150	150	149	150	1,944
フィリピン	149	150	150	150	150	150	149	147	148	149	150	149	150	1,941
シンガポール	149	150	150	150	150	150	150	147	149	149	147	146	149	1,936
タイ	149	150	150	150	150	150	150	150	149	147	150	150	150	1,945
ブルネイ	5	30	49	50	50	49	50	43	50	48	49	48	49	570
ASEAN諸国小計	748	778	799	800	800	798	799	786	793	792	791	792	797	10,273
モンゴル	—	—	—	—	—	—	—	—	10	10	10	10	10	50
ミャンマー	—	—	10	10	0	0	0	0	0	0	20	20	20	80
インド	—	—	—	—	—	—	—	30	29	30	13	23	27	152
バングラデシュ	—	—	—	—	—	—	—	20	20	20	20	20	20	120
パキスタン	—	—	—	—	—	—	—	20	20	20	20	20	20	120
ネパール	—	—	—	—	—	—	—	10	9	10	10	10	10	59
ブータン	—	—	—	—	—	—	—	5	5	5	5	5	5	30
スリ・ランカ	—	—	—	—	—	—	—	10	10	10	10	10	10	60
モルディヴ	—	—	—	—	—	—	—	5	5	5	5	5	5	30
南西アジア諸国小計	—	—	—	—	—	—	—	100	98	100	83	93	97	571
アフリカ諸国	—	—	—	—	—	—	—	—	—	50	100	97	95	342
フィジー	—	—	10	10	11	12	12	12	12	12	12	12	12	127
パプア・ニューギニア	—	—	10	14	30	34	30	30	30	30	30	30	30	298
その他太平洋諸国・地域	—	—	—	—	45	38	36	32	36	34	38	36	47	342
太平洋諸国・地域小計	—	—	20	24	86	84	78	74	78	76	80	78	89	767
ヴィエトナム	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	98	99	197
カンボディア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	30	30	60
ラオス	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	20	18	38
インドシナ小計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	148	147	295
合計	748	778	829	834	886	882	877	960	979	1,028	1,084	1,238	1,255	12,378

分野別プログラム実施都道府県



2. 招へい青年の印象

アジア

ブルネイ

私の日本の印象

ロスティナ・ペヒン・ダトー・パデュカ・ハジ・モハマド・タヒール
(社会開発グループ)

日本は国民と経済の両面から高度に発達した国です。豊かな伝統と同様に高度に発展した工業資本に恵まれ、私はこの国が千年以上もさかのぼる歴史の名所を数多く持っていることに、とても印象づけられました。

日本はまた、地方の生活も温存してきました。地方の風景は、緑豊かな野原や澄みきった川などとても美しく、田園の美は大都会とはまったく違っていました。最も美しい自然の造形は富士山で、まさに息を飲む美しさでした。

日本人、特に、地方の人々は非常に心が温かく、友好的です。地方の暮らし方は都会の生活に比べるとゆったりしています。東京に暮らす人たちは、とりわけ地下鉄の中では常に急いでいるように見えます。事実、忙しく動き回るのは車だけでなく歩行者の流れも同じです。

私的な意見ですが、私が感心した点は、日本人は最も時間を厳守する国民だということです。それに社会も勤労志向で、日本の人々にとっては、仕事が第一優先になっています。

他方、金沢、京都、広島のような地方都市は、東京とは少し事情が違っています。それら地方都市の生活のペースは、東京に比べるとややゆっくりしています。実際、それらの地方都市は私の故郷を思い起こさせます。

さて、私の30日間の日本での滞在は、わくわくする楽しさに溢れた体験に満ちていました。美しい国を訪れ、日本の人々に出会ってとても充実したものとなりました。同様に、歴史と文化遺産にも触れることができました。

もし可能であれば、いつの日か再び来日し、懐かしい友人に会いたいと願っています。私の日本滞在は今までで最高の経験でしたし、数々の思い出は、いつまでも私の心の中に生き続けていくことでしょう。

では次の再会を楽しみに……。皆様、さようなら。

日本での1カ月

ブルネイグループ
(ASEAN混成 教育1グループ)

まず初めに、私たちはこの素晴らしい日本を訪れる機会を与えられたことに感謝している。この旅を可能にした日本の政府に感謝の意を表したいと思う。

日本は多くの人が知っている国である。ここを訪れた人は近い将来また戻って来ることを熱望している。私たちはメディアを通して日本の先進技術と高い知能をもつ日本人がいることを知っている。

来日前、日本で生活していくうえで多くの困難があるのではという心配があった。特に食事（イスラム食）とコミュニケーション。しかし日が経つにつれてこれらの困難を乗り越えることができた。このプログラムの担当者たちは、多大な配慮と心遣いで私たちの要求に応えてくれ、私たちのすべての困難に手助けをしてくれた。彼らの心配りにより1カ月の日本滞在がまるで一日のように感じられた。

1週間の東京滞在の間、私たちは日本人が礼儀正しく、親切で、互いへの強い尊敬の念をもち合わせていることが分かった。日本人は、発展のための努力を惜しまず、同時に人々の福祉への配慮を忘れることはない。そのような意識をもっている人たちから感銘を受けた。

東京での滞在後、私たちのグループ（教育1）は大阪へ移動した。東京の雑踏に慣れてきた頃だったのでみんな初めは東京を去ることに気が進まなかった。しかし、大阪でのプログラムがメインプログラムであった。大阪へ私たちは新幹線――聞いたことはあるが、乗ったことのないもの――で行った。それはなんともスリリングな体験だった。

大阪では、幼稚園から大学までの多くの教育施設、府庁、教育センター、そしてダイハツ自動車工場を訪問した。また地元の先生との合宿セミナーに参加した。そこでの意見交換はとても興味深かった。ホームステイプログラムもたいへん楽しかった。私たちは皆、ホームステイ前は不安でいっぱいだった。しかしホームステイ後の私たちの気持ちは劇的に変化した。日本のライフスタイルを体験したほかに、彼らは私たちをまるで家族の一員のように迎えてくれた。最初の心配が嘘のように、何人かにとっては週末があっという間に過ぎたようだった。

私たちは大阪で多くの貴重な体験をした。日本人の効率的な仕事の仕方、教育制度、そして何よりも重要な日本の文化を学んだ。日本人はとても勤勉だ。日本人は各県ひいては国を発展させるために精力を傾けている。これにもかかわらず、文化を忘れてはいないのである。文化を維持することにより、互いを愛する意識をもち続けている。これにより2週間の滞在後、大阪を去るのは寂しかった。

見学旅行の広島・京都では、改めて日本人の素晴らしさを知ることができた。

1カ月の日本滞在を終えて、私はどの日本人も〝技術は技術、人間は人間〟という考えをもっていると感じた。それはどんなに技術が素晴らしくてもおごることなく、全人類を愛、尊敬そして誠意をもって接するということを意味するのだ。

日本滞在で得た体験は私たちの記憶に永遠に残るであろう。またどんなに努力しても、日本で受けた人々の親切に報いることはできないと思う。

日本の印象

アブドゥル・ラーマン・ビン・アワグ・ハジ・アポン
(ASEAN混成 社会福祉グループ)

今回が私にとって初めての日本訪問であり、到着したその日から新しい経験をしました。自分でいろいろ体験したいと思い、付き添いなしで買い物に出かけたのです。実践に勝るものはありません。私は、学校で日本の背景については学びましたが、日本人、文化、経済については、ほとんど知りませんでした。

日本に来て1週間後、日本人が礼儀正しく、マナーがよく、必要とあればお互いに助け合っていることが分かりました。また、日本人は一日7時間以上働くこと、さらに夜遅く会社から帰宅することを知り驚きました。毎朝早く出勤し、決して時間を無駄にしない彼らにとって時間は大切なものです。会社には時間厳守で出勤します。私たちが訪れた省庁、機関などで彼らは能率的に、意欲的に、また生産性重視で働いていました。

老齢の方々がそれぞれの分野で仕事をしていることも知りました。年配の女性でさえ、たとえば、荷物を運ぶなどの仕事をしていました。

訪問先の施設には最新の設備を取り揃えてあり、それらの建物は地震などの災害に備え、強化材を使用していることも知りました。心身障害者のための口腔センターを訪問した際には、スタッフの方々が治療しているところを見せていただきました。このセンターもまた最新機器を備えていました。民間企業における雇用に関してさえ、心身障害者の方々は優遇されています。また、心身障害者のための公共の運搬サービスや、交差点での盲人のための音楽による誘導や点字ブロックなどがあることも知りました。このことは、健常者と非健常者の間に差別が存在していないことを示していると思います。

■アジア

□インドネシア

この地に魅せられて

リファ・ザイナニ
(社会開発グループ)

JICAによる「青年招へい事業」で日本に滞在した1996年5月14日～6月14日までの1カ月の間に、多くの印象深い経験をすることができた。そのひとつが日本人観である。

来日前、日本人は高慢で話しにくいというイメージをもっていた。インドネシアで出会った多くの日本人が、無口で他人のことなどお構いなしであるかのように振る舞っていたからだ。しかし、日本に滞在するうちにそうした印象は少しずつ消えていった。日本で出会った日本人は実に親切で友好的だった。日に日に私は彼らと親しくなり、彼らとともに気ぜわしい東京の日常生活に飛び込んだ。一緒に電車に乗り、食事をした。いつしか私も彼らと同じ日本人になったような気がした。

北海道千歳市で行われたプログラムもたいへん印象深いものであった。この地では北海道の青年たちとの出会いがあり、日本人家庭に2晩滞在するという経験をした。北海道の青年たちとの交流は本当に楽しかった。日本の青年を知るよい機会であり、心おきなく討論できたからだ。彼らはインドネシアについて熱心に知ろうとし、インドネシア語を勉強したがった。私には、それがとてもうれしかった。私たちは、お互いのことをもっともっと知りたくて、経験を語り合い、知識を分け合い、意見交換をした。またゲーム、踊り、歌等を教え合ったりもした。私たちは知り合ったばかりの間柄ではなく、かねてからの友達のようであった。文化と民族の違いもあまり感じなくなり、大家族が集まったような雰囲気だった。

日本人の家庭を体験するホームステイプログラムを通じて、日本人の生活習慣についてより一層深く知ることができたと思う。家族の一員として時を過ごし、普段着の日本文化に馴染んだ。ホストファミリーは快く私を歓迎し、食べ物も何が口に合うか等あれこれ気を使ってくれた。また、就寝や入浴の時間なども忘れずに知らせてくれた。とても大切にされているんだな、と感じた。なんだか本当の家族のようで、私の祖国の家族に対するホームシックも癒された。

インドネシアに帰るときがやってきた。ここでの生活にやっと馴染んだというのに。この地に魅せられてしまったというのに。これらの思い出はインドネシアに帰っても心に残り続けるだろう。

日本みつけた

アルフィアトゥム・サラサティ
(経済Aグループ)

日本人が私たちインドネシア人とは異なるアイデンティティをもち、独特の考えをもっていることにある種の感動を覚えた。特に大都市としての東京はその違いを際立たせている。東京で私が見たものは、すべてが完璧で、自動化され、高度な技術が揃っている。

日本は洗練された技術の国であり、また物価が高い国としても有名だと聞いていた。日本では何

でも値段が高いが、それは市場の需要が大きいために物価高の状態が続いているのだ。日本製品が国内市場だけでなく、国際市場をも席巻しているが、そのためにどんな市場戦略をもっているのか。これらのことは私にとって大きな疑問だった。幸運に恵まれたことと神様のおかげで私はこのプログラムに参加することができた。

日本で過ごすうちに、先ほどの疑問はだんだん小さくなっていった。日本人のビジネス活動や社会生活について、この目でじっくり見、分析することができたからだ。しかし私の頭の中には、うまく説明することも、答えることもできないいろいろな疑問がまだ残っている。それらは誇りとか感動に似た感情であり、私が日本を見、観察し、分析したときには評価することができなかった感情である。そう、日本人というのは、規律正しく教育され、創造力をもって何かを生み出そうとする意識があり、国内や海外市場を創出するための精神を持っているのだと気づいたのだ。

あるとき、私たちインドネシア青年と日本青年は冗談を言い合いながら交流プログラムを楽しんでいた。お互いの経験を分かち合い、国と民族のために何かしら意味のあることを見いだそうとしていた。そのときほど〝友情〟という言葉の意味について感動したことはない。これこそ私たちがこのプログラムに参加した真の意味であると思ったのだ。

さまざまな経験と心に深く残るふれ合いがもてたことが、この国での一番の思い出だ。己の進歩のために多くのことをなし遂げ、その経験を開発途上国、とりわけインドネシアへ分かち合ってくれたこの国の……。

そのほかに印象に残ったことは、日本ではどこでもごみ、ちり、残飯などをきちんとより分け、清潔にしていることである。それは規則によって整然と行われている。

インドネシアと日本の兄弟姉妹たちよ、より良い生活を築き、それをお互いに分かち合おう。平和な暮らしと福祉と平等な繁栄がどの町でも、とりわけわが国インドネシアで実現されたと感じられるように。

忘れられないホームステイ

パフティアル・アラス
(経済Bグループ)

あっという間に時間が過ぎ去っていく。記憶に刻み込まれた多くの思い出。思い出たちよ、おまえはいつ私のもとへ舞い戻ってくるのか。甘い思い出……なんと美しい響き。思い出と無縁な世界などあり得ない。そして全き健全な精神を持つ者は、一生涯忘れ得ない思い出に出合うのだ。

「青年招へい事業」で日本を訪れ、楽しい思い出を数限りなく得た。このプログラムを通じ、私は真の友情の意味に開眼した思いがする。そうなのだ。友情は民族や肌の色の違いをものともせず、言葉や文化などの壁をも超えるものなのである。なかでも最も印象に残ったプログラムは、数日間にわたって日本の家庭に寝泊まりし、そのなかに溶け込んだ日々、つまりホームステイだ。たった3、4日とはいえ、少なくとも私は地方に住む日本人家庭の生活を垣間見ることができたように思う。

もちろん受け入れ家庭の方々と会う前は、不安と恐れでいっぱいだった。他の仲間も同じだったと思う。受け入れ家庭の方々に失礼がありはしないか、言葉が通じずにコミュニケーションが図れないのではないか、そんな不安や恐ればかりが頭をよぎった。しかしそんな不安も、受け入れ家庭

に到着した瞬間に消え去った。みんなに出迎えてもらったときには、感動と喜びが入り交じったような気持ちが湧き上がってきた。皆、私が来るのを心から待っていてくれたのだ。彼らの顔を見てすぐにそれが分かった。

言葉の問題も、家族の方々と意思疎通するうえでの重大な支障とはならなかった。すべての手段が総動員され、手真似や身振りまで登場した。たとえ日本語はほとんどできなくても、英語に多少の日本語と身振り手振りで意思は通じるのだ。

白状すれば、最初は緊張していて、言葉がなかなか口から出ず、どうしたらよいのか困ったものだ。けれども翌日にはお互いすっかり打ち解けていた。私にとって何もかもが目新しい日本人家族との楽しい日々が過ぎていく。なぜなら、日本人の真の日常の活動をここで初めて実感することができたからだ。

仕事狂、これが以前私がもっていた日本人像だった。実際私が見たものも、このイメージから大きく外れるものではなかった。考えてもみてほしい、お父さんは朝8時に仕事に出かけ夕方5時に帰宅するが、なんと帰宅後の夕方と夜の時間帯に農作業をこなすのだ。私自身もお父さんが一人で働くその姿を見てじっとしていられず、気がつくと農作業を手伝っていた。お母さんも同様で、私のために日本料理を一生懸命作ってくれた。70代になるお婆さんさえも、仕事をするうえでは負けてはいない。高齢のご老人が意志も強固に仕事場に向かう姿を見て、私は自分が恥ずかしくなった。

日常の忙しさの合間に、本当に美しく素晴らしい石見町の景観を見に行った。自動車部品の製造工場にも連れていってもらった。私の専門であるビジネスに関係した有意義な体験も得られた。

たった3泊4日のホームステイではあったが、私は十分に楽しんだ。ホームステイ最後の日、私も家族の皆もお別れの涙を流した。そして、またいつ会ってお互いの国や文化の話をできるのか、と彼らは尋ねた。別れにあたって、私は高ぶった気持ちを彼らに隠すことはできなかった。数日にわたって心から私を迎え入れてくださった皆さんに対し、心からの感謝の気持ちをお伝えする以外、言葉は見つからない。

ホームステイ家族の皆さん、さようなら。

石見町よ、さようなら。

香川の新しい家族

リズキ・ヤヌワル
（農業グループ）

このプログラムに参加したことは、日本の社会に対する知識を深め、また経験を積むうえでよい機会だった。多くのプログラムのなかでも、最も楽しかったのはホームステイだった。日本人の日常生活を体験し、生活習慣を知ることができたからだ。

ホームステイが始まる前はドキドキしていた。まったく言葉もできないし、日本人の生活習慣にもうとい自分が3日間も知らない人の家で暮らすのだ。不安でいっぱいの頭のなかでいろんな質問がぐるぐる回っていた。

彼らはぼくを受け入れてくれるだろうか？

どういう態度で接してくれるのか？

どうやってコミュニケーションをとればいいのか？　etc.

実際にはこの怒濤のように押し寄せた質問には、やがてゆっくりとひとつひとつ答えがみつかった。ぼくは本当にラッキーだったみたいだ。ホストファミリーはぼくをまるで本当の家族のように受け

入れてくれたからだ。家に入り、居間で挨拶をしたとき、お母さん、お父さん、おじいさん、おばあさんが次々出てきて、ぼくを抱きしめ、温かい心のこもった日本語で挨拶をしてくれた。その言葉は理解できなかったけれど、彼らが本当にぼくを受け入れてくれたのだと感じた。それからのおしゃべりは日本語、インドネシア語、英語、さらに身振り手振りをまじえ、辞書、地図、紙、ボールペンを使った楽しいものだった。ましてや86歳になるカクシャクとしたおじいさんが若い頃海外へ赴いていたときのことを、面白おかしく力強い口ぶり（日本語）で話してくれたときには全員で大笑いした。長女の美都子さんがぼくにも分かるように通訳してくれた。

次の日、朝食を済ませたあと、美都子さんは友人たちがインドネシア料理を作りに来てくれることになっていると話してくれた。レシピは本屋でさがしてくれたそうだ。12時ちょうどに美都子さんの友達が集合し、街中をドライブしたあと昼食をすませ、スーパーで買い物をした。4時から田舎風の家屋のおじいさんの家で料理が始まった。美都子さんたちみんなはとても仲がよく冗談を言い合いながら、夕食の時間になるまで料理を作った。その日の夕食は家族や美都子さんの友人たちとテーブルを囲んで、冗談を言い合ったり、プレゼントを渡したりと、和気あいあいとしたものだった。

日曜日はお父さん、お母さんに誘われ屋島へ向かった。標高293mの頂上にある屋島寺をまわり、水族館や美術館に寄ってから、屋島山の麓でうどんを食べた。家に帰り着くと待ち受けていたおじいさんが、バイクで家の近くの田畑やいろいろな場所を見せに連れて行ってくれた。帰ってから夕食をとった。

お別れレセプションにはお母さんと美都子さんが出席してくれたが、せっかく親しくなったのに別れなければならないことを思うと悲しくなった。また、特におじいさんのこと――とてもいい人で、インドネシアの織物をプレゼントしたとき、涙をこぼして死ぬまで毎日使い続けてくれることを約束してくれた――を思い出すと一層悲しくなった。

香川駅を出発する日、お母さんと美都子さんが、思いがけず着物で見送りに来てくれた。とてもうれしかった反面、別れなければならないことを思うと悲しかった。

美都子さん、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさん、皆さんのことは一生忘れないだろう。

日本の学校教育視察メモ

アグス・トリィ・グマワン
（教育グループ）

日本の教育関係者とディスカッションを行い、直接情報を得たこと、そして小学校、中学校、高校から大学に至るまでの教育機関を視察できたことは、私にとって、とても貴重な経験であった。この感想文で、私は小学校から高校にかけての教育に対する感想と日本の教育分野に対する批評を述べたいと思う。

今日に至るまで、日本の学校教育は、日本人の特性と伝統文化を保持しながらも、先端技術をめざし発展させ、国民の生活レベルを向上させることに成功した。しかしながら、急速に発展する科学技術に後れをとらないようにするあまり、教育が飽和状態となってしまったり、あるいは文化面を尊重しないがために、将来日本の教育に問題が生じるかもしれない。この問題は教育関係者の指針を考えていくうえでの課題となるであろう。

学校視察の際、特に印象に残ったのは、生徒が教師や目上の人に対し礼儀正しく、尊敬の念をもっていることと、生徒たちが自主的に学校や身の回りをきれいにしようと心がけている点である。授業やクラブ活動で使用される設備も、学習面と創造力向上という点で十分整っている。生徒たちの学校生活は多忙で、もちろんポジティブな部分もたくさんあるが、ネガティブな部分もある。ネガティブな部分というのは、家族や集団のなかでの社会性の欠如と、学校生活があまりにも忙しいために起こる行動の粗暴化である。

そのほか、非常に興味深かったことは、学校の方針でもある年間教育目標である。これは、教育現場や生徒の行動に直接影響を及ぼす。たとえば、私が訪問した山形第四中学校の場合、今年の教育目標は「登校拒否児対策」である。私は学校側から登校拒否の原因は普通、両親から能力以上の過剰な期待をかけられたり、他の生徒からいじめを受けたりした結果の心理的な要因であると説明を受けた。学校側がとった対策は、まずカウンセリングと精神面でのケアを行ったことであった。結果として登校拒否の生徒数は減少し、大きな成果をあげたという。インドネシアでは普通、教育目標は一般的なことで、毎年同じことの繰り返しであり、このような実践的な方針にまではめったにならない。そして登校拒否や不良生徒が出た場合、学校側はその生徒を退学させ、両親の元へ返す権限を持っている。

以上が、私がこのプログラムに参加して感じたことである。そして、ここで得た多くのことがインドネシアの教育の発展に貢献できると思う。

教育システムの日本社会への影響

アブドウシイ・シャクール・アミン
(ASEAN混成 教育2グループ)

疑いようもなく、日本は今もなお世界経済において重要な地位を占めている。そして、その教育システムが日本を現在の姿にする強力な推進力となってきたことは、明らかであることを再確認しておきたい。それは、私たちの目から見ると、強靭な日本の教育システムにあると思える。

何よりもまず、時間の正確さが学校でも、会社でもそして地下鉄においてさえ、最も厳格に守られるべきこととして浸透していることがあげられる。従って、学校においても生徒は種々の学校活動（カリキュラムに示されている）ごとに区分された時間割に厳格に従っている。

学校の設備が充実していることも見逃せない。これは日本が教育分野にかなりの予算を割いている結果である。学校は一般機器からハイテクのコンピューター・ソフトウエアに至るまで、最新の設備を備えている。生徒たちはこれらを活用して、授業を受け、そして討論を行うことができるのである。

生徒も教師も、学校（もしくは文部省）の決めた厳しい規定に従っているという事実も、日本の今日の成功の要因の一つとなっている。生徒は、制服、髪形、そして靴下の種類に至るまで、規則に従っている。これにより、自分では何も決められない生徒も出てきている。

ただ従っていればよいということの利点もあるだろう。しかし社会状況は変化するので、時には

各自に自分で判断する余地を残しておくことも必要と思われる。各自一人一人がある程度、創造性を発揮する機会を与えられるべきであろう。

学校では共同管理システムが採用されている。自動車会社経営と学校経営は全く異なるものであることは自明の理である。であるから、学校における経営管理体制はもっと改善されてもよいだろう。

最も大きな課題として明らかになったのは、試験指向型の教育システムであるということである。これは生徒のみならず、教師、両親にも同じように過度のストレスと圧力を与えるものとなっている。

経済大国としての日本の成功は教育システムの成功の賜物といえる。しかしそのシステムも混乱に陥っているようであり、改善は必須である。

もちろん、最善をめざすことは不可能に近い……しかし、より良い道は常に存在するのである。

心はひとつ

ホーリ・アメタティ
(ASEAN混成 保健医療グループ)

インドネシアでは、日本は何と言っても「日出づる国」として有名です。日本へ行けることが決まって、私は世界で最初に日の出を見ることができる国に1カ月滞在できるのだ、と毎日たいへん興奮しました。

私の日本滞在は予想をはるかに上回る素晴らしいものでした。新しい友人を得、貴重な体験をし、視野を広げることができました。

私は今でもはっきりと覚えています。東京に着いた最初の日、不安と期待で私の胸ははちきれそうでした。1カ月がずいぶん長い期間に思えました。私とは経歴も性格も考え方も違うたくさんの人々と、どうやって友情を育んでいったらいいでしょうか。いったいどうして温かい住み慣れた世界から、冷たい、もしかしたら意地の悪い人たちがいるかもしれない遠い国へ来てしまったのでしょうか。

日が経つにつれ、私のこの不安は馬鹿げたことだということが分かりました。日本人の細やかな気配りや温かさに私は驚くばかりでした。たくさんのお寺や神社の美しさに触れながら、ASEAN諸国間の友情の絆も固く結ばれていくようでした。そして、私たち全員が日本の進んだ技術に圧倒される毎日でした。

ユニークな個性が現れてきたのもこの頃です。たとえば、ブルネイのラヒムはビデオカメラをいつも抱えていてまるでCNNレポーター、インドネシアのアデはやんちゃでちょっと〝あぶない〟若者、フィリピンのアナベルはプロの歌手そのもの、そしてシンガポールのアテイカは頑張り屋さん、というように。

私たちはよく笑いました。冗談を言っては笑い、誰かをネタにしては笑い、誰かがホテルの有料放送にすっかりはまっているといっては笑い、竹田さんの自称「めちゃめちゃ英語」に笑いました。「300円」と誰かが言えば、全員大笑いしたのです。(失礼、内輪の冗談でした。)

また、私たちは日本のコーディネーターになんでも頼るようになっていきました。竹田さんのいたずらっぽい表情、青木さんの父親のような温かさ、そして万里さんの優しい微笑み。彼ら3人なくして、私たちの日本滞在を語ることはできません。29人の個性の強い人間を世話するのは大変だったでしょうが、3人の日本の友人は決して笑みを絶やすことなく辛抱してくれました。

私たちはさまざまな日本の医療現場を視察しました。なかでも大阪府立総合医療センターは圧巻でした。私たちの国の病院と比較してみると、素直に日本の医療設備の充実ぶりを認めざるを得ません。ここで私たちは多くのことを学びました。

もちろん、プログラム中何もなかったわけではないが（インドネシアのフィルダウスが足を捻挫したり、青木さんが足を怪我したり）、とにかくすべてがスムーズで最高のプログラムでした。

でも、私たちにとって忘れられない出来事が起きたのは、1996年の12月1日の京都の夜。キャーと言う叫び声で始まりました。火事？　いいえ。地震？　いいえ。それは天から降ってくる雪でした（最高！）。ASEAN諸国はすべて熱帯に位置しています。私たちのほとんど全員が今まで雪を見たこともなかったし、日本滞在中に雪が降るとは思ってもいなかったのです。

それは奇跡のような神様からの贈りものでした。私たちは寒さも忘れてまるで幼児のようにはしゃぎ、声をあげホテルの駐車場へ出ていきました。誰も私たちがたくさんの人々の生死の責任を負う仕事をしている医師や看護婦とは思わなかったでしょう。あるいは、患者が私たちのこの夜の姿を見たらもう二度と病院には来なくなるでしょう。そしてその夜、私たちは雪の中ではしゃぎながら、互いを隔てる壁が崩れてゆくのを感じたのです。フィリピンのコニー、タイのドンニャ、日本のアキコではなく、私の友達のコニー、ドンニャ、そしてアキコなのです。友情が育つとともに国境の壁が消えました。肌の色、言葉、そして人種の違いを超えてひとつになったのです。一番大事なこと、それは人の心の温かさなのです。

アジア

マレイシア

日本での経験

ムハマッド・ファヒミ・ビン・アブ・バカル
（経済・経営グループ）

1996年度の「青年招へい事業」の参加者として日本を訪れることのできた私は、いくつかの興味ある経験を得た。この価値ある経験を有意義な手本にするために持ち帰りたいと思っている。

特に忘れられない経験は仕事に対する勤勉さと、真剣に取り組む姿勢をもつ日本人の勤労文化についてである。熱海で行われた三菱グループからの参加者との意見交換で、私は日本人が一般にたいへん勤勉であることが分かった。その参加者の大部分が、勤務時間は毎日夜８時以降までであることを認めた。それどころか、時々夜12時過ぎてやっと帰宅することもあるそうである。そのほかに、ディズニーランド訪問の機会があったのだが、驚いたのは、来場するほとんどすべての客に対して、休むことなく、「いらっしゃいませ」「おはようございます」「こんにちは」と声をかけながら微笑んで立っている接待係の人を見たときである。その人が一日中そしてほとんど毎日その仕事を行っていることを想像してみよう。同じようにショッピングセンターや、レストラン等で働く人たちのことを。

日本人にとって清潔さは重要なことである。清潔できちんとしたものを身につけているほかに、美しく清潔な都会は私の注意をひいた。池袋、広島、京都そして大阪の高速道路は清潔でごみもな

い。道路沿いには注意をひくように剪定された大小さまざまな木々が植えられている。これはこのような街をいかにも緑の公園の中にあるかのように見せているのである。また、日本人は他人を敬う気持ちをもっている。他人に対して迷惑をかけたと思われることのひとつひとつに「すみません」という謝罪の言葉がかけられる。特に来客に対して頭を下げる挨拶は、その人に栄誉な気持ちを起こさせ、敬われていることを感じさせる。このことは即、慈悲深く親しみのある社会をつくることに繋がる。この態度がマレイシアの社会に取り入れられればどんなに素晴らしいことだろう。

時間厳守も日本人にとってたいへん重要なことである。ここでは1分1秒がどの活動においても重んじられている。たとえば、電車の運行は時刻通りである。私が参加したこのプログラムも同じである。各プログラムは、決められた時間に従って遅れることなく行われた。日本社会では時間尊重と常に確実であることを求められているようである。

日本人家族の親密さは、いわき市でのホームステイ経験後に特にはっきりした。家族の絆は実に強い。若い世代は高齢者を敬う。私のホスト自身も常にお年寄りや家族の者に対して素直に敬意をはらっていた。発展した国ではあるが、日本人の家族関係はまだ強く、家族崩壊が現実に見られる他の西洋諸国とは違う。私に示してくれた家族の親しさは、少なくともマレイシアにいる家族への思いを軽減してくれた。

最後に私はこのようなプログラムが続けられることを期待しているし、将来、マレイシアが実施しているルック・イースト政策のすべての目的が達成されることを信じている。

日本での楽しい思い出

シャイック・ロスリナ・バックス
(中小企業グループ)

この「青年招へい事業」のプログラムに参加する機会は、私にとって、日本という国の言葉、文化、生活様式をより深く知るための、またとない黄金に値する機会であった。

さまざまな経験のなかで、私にとって忘れることのできないひとつの出来事は、日本で誕生日を迎える機会を得たことであった。その朝、私はいつものように輝かしく、晴れ晴れとしたうれしい気持ちであった。ただ私は、誕生日はひっそりと迎えるのが好きなので、その日の誕生日のことについては誰にも知らせていなかった。

その日の予定は、午前中に大分県庁を訪れ、午後は太陽の家と竹の博物館訪問であった。

参加青年であり私の友人でもある一人は、私の誕生日のことを思い出したが、コーディネーターに伝える機会を逸していた。そのとき、25人の参加青年と2人のコーディネーター、同じく2人の大分県庁の担当者、そして日本ユースホステル協会のプログラムコーディネーターが、私のために誕生日の歌を歌いだした。そして私は、未だかつて経験したことがないような即席の挨拶をしなければならなかったのだ！　彼らのこの行為に、私は非常に感動した。

そして、また夕食のときに、私の心に触れる出来事が起こったのであった。大分県の担当者の方から、イチゴのバースデーケーキがプレゼントされ、テーブルにはマレイシアの特別な黄色いご飯

を思わせるもの（注:日本の赤飯にあたる）があり、そして、私の趣味のひとつであるカラオケまで用意されていた。私たちは楽しさを満喫して歌った。この夜の食事は本当においしく、食欲が刺激された。

私が経験したこの感動は、言葉では言い表せないものである。初めてマレイシア以外の国で誕生日を迎えたこの日は、私にとって特別な日なのである。このように盛大に1996年の誕生日を迎えることができ、十分に親密になったたくさんの新しい友人に囲まれたことは、私にとってつきることのない喜びであり、私の思い出のなかで、いつまでも生き続けることであろう。

日本—発展と過去の間に

サタリ・ビン・マルコム
（農業開発グループ）

日本はG７のひとつである。経済の安定はいうまでもなく、さまざまな最新技術においても、日本が世界のリーダー的存在であることに間違いはない。しかしながら、過去の歴史においても外国の進歩に追いつくことに懸命であったように、日本はずっと次の時代への展望を怠らなかった。江戸時代および将軍の遺産はお金では評価できない宝である。

この太陽の出づる地に足を踏み入れる憧れは、1996年９月19日、成田空港に降り立ったときに遂に達成された。そして限られた期間で、価値ある経験を見つける旅が始まったのである。地震の際の安全の体験的研修は、忘れられない経験である。

孤独にみえる1178万人を有する東京の街は、日々の生活を営む数百万人の人々を大地の懐、地下鉄の路線に飲み込んでいる。人々の敏捷さ、時間厳守がこの国の発展を決定的にしたのである。

うっとりするような美しさと涼しい気候の岩手は、来訪者の心をいつまでも引きつけるに値する土地である。岩手の人々の人なつこさ、親切さ、特にホストファミリーのそれは、深く心に刻まれた。

広島！

1945年８月６日の原爆投下による崩壊の証跡を目のあたりにしたとき、私は大地に落ちる一滴の涙を禁じ得なかった。この出来事が、戦争は誰にも利益をもたらさないという教訓となるように。また、核がこの地上から消えてなくなることを願わずにはいられない。

高速道路と鉄道の結合した瀬戸大橋は、本州と四国の架け橋となり、素晴らしい景観をつくりだしている。このユニークさが観光客を引きつけているのである。

客に対して、笑顔を絶やさない売り子の心配りとともに、いらっしゃいませ、という言葉はずっと思い出に残るであろう。

ホームステイ—想い出のなかに刻まれた素晴らしい体験

シャハブディン・ビン・ハッシム
（教育グループ）

JICAによる地方プログラムのひとつがホームステイであった。私たち参加者のなかには、すでに

マレイシアにホストファミリーと呼べる家族がいる者もあるが、今回のホームステイはまったく異なっていた。日本とマレイシアの距離5396kmは言語、文化、そしてさまざまな面で私たちを隔てていた。「アウトサイダー」として、この出来事は「青年招へい事業」でのクライマックスに位置付けられる。

私たち一行は遷喬小学校への訪問を終え、1996年10月4日午後4時きっかりに、「ふれあい農園」に到着した。この美しく清々しい場所が、ホストファミリーとの出会いの場所となった。日本人ボランティアによる「焼きそば」などの料理のほかに、私たちはチキンカレーを準備した。時を同じくして香月氏が、ホストファミリーを紹介してくださった。私は村山さんの一家に引き受けられた。ひととおりの自己紹介が終わると、私たちはホストファミリーの背景を多少知った。夜7時半、私たちは「オール・ザ・ベスト！」「連絡忘れるなよ」と友人らと別れの言葉を交わし、それぞれの家へと向かった。

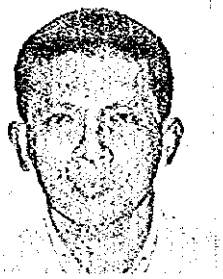
福知山の村山一家は、私の訪問を心より喜んでくださった。私は日本のたいへんおいしい果物をごちそうになりながら、自分のことや家族のことについて互いに語り合った。また床に就く前の時間を利用して、マレイシアについてのビデオを一緒に観賞した。「私の気持ちです」と言ってマレイシアのお土産を渡すのも忘れなかった。翌日朝食後、家の周りと近くの学校に連れて行っていただいた。午後は美しい町、舞鶴が、私たち家族全体をもてなしてくれた。お母さんは、前の晩特別な食事を用意してもてなしてくださったので疲れている様子だった。村山家の親戚も訪ねて来てくださり、楽しい時を共に過ごした。その親戚である伏見家ともたいへん親しくなり、一緒に有名な福知山城を訪れた。普段は遠くに住んでいるこの2家族が、2時間ほど高台の素晴らしい景色を楽しんだ。

時の流れが妬ましく感じられようとも、私たちは悲しい気持ちのまま「さようなら」を言わなければならなかった。綾部国際交流プラザでの別れは、非常に悲しいものだった。「また会いましょう」。来年の夏には、村山一家はきっとマレイシアを訪れてくださることだろう。

たとえ、ホストファミリーとの間にコミュニケーションの問題が生じたとしても、別の手段を考えて表現することは不可能なことではないと思う。また、私たちの基礎にある互いに敬い合う気持ちをもち続けることによって、異なった文化ではあっても、友好というものが固く結ばれるのである。これこそがアジアの家族たる最も重要なことであろう。

日本での経験

アブドゥール・ラーマン・ビン・アナス
（科学技術開発グループ）



私たちが既に知っていたように、日本は特別な水準の生活文化をもつ国のひとつであった。そのなかで明らかなもののひとつとして、日本人同士が互いに尊敬し合う姿勢、援助を必要とする人々を最優先に考える思いやりの姿勢、等が挙げられる。そのほかにも、日本の古い文化は継承されているだけではなく、若い世代によっても形づくられようとしている。たとえば、茶道、武道、歌舞伎等のように。

雇用主に労働者が払う敬意は、彼らが行う仕事に対する強い責任感に表されている。この特性は、彼らの人生のなかに、まだ小さな頃から植えつけ

られており、学校訪問の際にも、生徒たちは学校用務員の助けを望むことなく、学校の周りの清掃に取り組んでいた。このように、私たちは、日本の労働者たちが雇用主を自分の家族のように思い、その誠実さは彼らが定年に達するまで続くものであることが分かる。

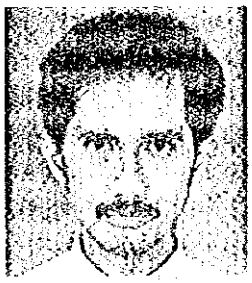
日本での1カ月の間に、私たちはさまざまな最新技術、労働者の創意工夫が完全なものになるまで、彼らが努力を続けているのを目の当たりにした。そのほかにも、私たちは、たとえば稲作地帯の側に「アパート」が建てられているなど、社会進歩と釣り合った開発の現場を見ることができた。

見学旅行プログラムでは、私たちは広島の平和記念公園などいくつかの重要な場所を訪問することができた。この公園は、原爆による破壊から回復する広島の町のうめきであり、平和を願うシンボルである。公園には、広島平和記念資料館と、全世界の平和が永続するようにと願い建てられたいくつかの塔がある。その資料館で、私たちは原爆による攻撃が行われたときの、広島の人々の苦しみを理解する機会を得た。その資料館を見学する前に私たちは、原爆による攻撃に関係する「母たちの祈り」という一本のフィルムを見る機会を与えられた。そのフィルムを見たとき、私たちのグループのほとんどが、日本の人々を襲った悲劇のうえに、心から同情する涙を流した。また、このフィルムを通して、世界における核兵器の根絶が、いかに必要かということをも学んだ。

この「青年招へい事業」を通して、平和で繁栄するひとつのアジアの実現は成功したと感じた。

結論を出すまで――友情計画方式

トゥン・アハマド・ファイザル・
トゥン・アブドゥル・ラザック
(ASEAN混成 経済1グループ)



荷物をまとめて帰国の準備をするときが来た。こういう問題が起きることは前から分かっていたのだが、具体的にどうすればよいかをはっきりと考えてはいなかった。

問題は――私は荷造りが大の苦手ということだ。

おまけに40kgという手荷物重量制限が設定されている。

今は朝の4時、規定の重さ以内に抑えるためにさて何を捨てていこうかと考えている。それはとても簡単なことに思われる。

あのオランウータンの黒いTシャツを置いていこうか。どうせ古いものだし。だが、待てよ。フィリピンのレイチェルは、私が何かと彼女を煩わせたからか、いつも私を「オランウータン」と呼んでいたっけ。あのTシャツで私はいつも彼女のことを思い出すだろう。そして佐島マリーナで行われた合宿セミナーの友人たち。私があのTシャツを着た夜、皆よく笑った。太郎さん、アリさん、ケイさん、吉江さん、タッチーさんはじめ皆が笑ったときは本当に楽しかった。あのときに日本人の人間的な面を見ることができた。

そうだ。この目覚まし時計をゴミ箱に入れてしまおうか。安物だが確かにスペースを取る。しかし、待てよ。10分すすめてあるこの時計。私がそうしたのは、日本ではすべてが（実際にすべてのことが！）きちんと計画され、そのとおりに実行

されているからだ。時間を守れないことはずっと私の欠点だったが、目覚ましを10分進めることで、素晴らしい、有能なコーディネーターである河野さんと愛子さんの心配のタネがひとつ減ろうというものだ。この時計を見ることで、JICEや関連団体、関係者の方々が「経済１グループ」の分野別プログラムを企画・立案するために払ってくださった努力をはっきり思い起こすことができる。私にとってこの時計は、集中的努力により達成できる完璧さの象徴なのだ。

ああそうだ、大きくてかさばる地図帳を捨てていけばいいじゃないか。そう思った瞬間、五日市という名が思い浮かんだ。広島の原爆で亡くなったマレイシア人のお墓がある小都市。この地図帳のおかげでなんとか見つけることができたのだった。

そのお墓を訪れた日――とても痛ましく、悲しいときだった。亡くなった２人のマレイシア人の生命を思い、言葉では言い表せない心の痛みを感じた。広島で19万人の生命が失われたあのとき、どんなだったかを考える勇気は、私にはとてもなかった。

やれやれ、結局、何も捨てて帰ることができないではないか。持ち物ひとつひとつに思い出があるのだから。衣服にも、プログラム専用バッグにも、歯ブラシにさえそれぞれの物語がある。

もう５時。私は決めた。ここにあるものはひとつひとつが大切で思い出深く、とても捨ててはいけない。でも、重量制限を超えてしまったらどうする？　しかし、ASEAN青年同士で、また、日本の人々との間で培った友情や、ザカリヤ、フレデリック、ゴルフ、ジャクリーン、ティノ、クリスティーナなどの多くの友人を持てたことは、お金に換算できることなどではない。そして、これらひとつひとつがそんな友情の思い出を蘇らせてくれる物なのだ。

もう迷わない。思い出はひとつ残らずカバンに詰めて、さあ、出発だ。

日本の生活を体験して

シャリマン・ビン・ムヒディン
(ASEAN混成 行政Ｂグループ)

1996年11月５日、日本到着。成田空港から、初めて日本に入国した。ホテルメトロポリタンにチェックインした後、地下鉄であちこち動けるかどうか、とても不安だった。日本に来る前に自分の国で日本語の授業は受けていたので、どうやって地下鉄の切符を買うのか、「日本語」で聞き始めたものの、あいにく日本人の答えは何を言っているのか少しも自分には分からなかった。そのうえ、私が尋ねた日本人は英語が分からなかった。ともあれ、何とか私と友達は地下鉄に乗ることができた。何度か、目的とは違う駅に降りてしまった。駅では、日本人は非常に足早に歩いていた。いったい、彼らは何を追いかけているのか、不思議な気持ちだった。こんなに速く歩く人々は、世界中のどこにもいやしない。電車は３、４分おきにやって来る。それはさておき、私が最も驚いたのは、電車の中では寝ている人すらいるが、その人たちは自分の降りる駅に電車が着く直前には目を覚ますことだった。

数日後、「体験的日本語学習」に参加した。私を案内してくれたのは、かなり年配の日本人男性で、ブルネイの青年も一緒だった。その日の午後、昼食は和食をとった。寿司を食べたのは初めてだった。ブルネイ青年は「刺し身」を口に入れ、なんとか飲み込もうとしていた。彼は目を閉じて、無

理やり刺し身を飲み込んだ。次は自分の番だった。私も目を閉じ、無理やり飲み込んだ。ああ、ああ！何て味なんだ！　それから今まで、寿司を食べることはできなかった。

埼玉県に合宿セミナーで滞在中、日本人青年とどう付き合うかを体験した。そして、日本人は心の奥底では、とても付き合いやすく、友情にあふれ、温かく、親切で、喜んで手を貸してくれる、その他諸々の長所を持っていることが分かった。ホテルの近くの温泉にも行った。そこでは、皆、裸だった……。そうした光景を非常にきまり悪く感じたので、全く温泉に入らずに、小さな「お風呂」でシャワーを浴びるために部屋に戻った。

その後、新幹線で大阪市へ移動した。世界で一番、速い列車だった。日本人が何か作り出すときは、それは世界で最高のものに決まっていることを学んだ。それもそのはず、何せ、世界で一番速く歩く国民なのだから。それはそれとして、私は大阪に発つ前、友人と「ひかり」の前で写真を撮った。大阪では、ホームステイを体験した。非常に緊張していたけれども、反面、とても興奮していた。私のホストファミリーのお父さんとお母さんは、30代半ばで、男の子が2人いた。和式のトイレを使ったことがなかったので、ホームステイ中、なるべくトイレに行かなくて済むよう、ほんのわずかしか食べなかった。私のホストファミリーはたいへん素晴らしく、また非常に良い人たちだった。日本人は、皆、自分のホストファミリーにように思える。

広島は、平和に満ちた都市に見えた。そして、原爆資料館を訪ねた。第2次世界大戦中、原爆のもたらした苦痛は、今なお、人々の瞳の奥に見いだすことができる。また、彼らの心の深い場所にそうした苦悩が残っていることを感じた。私たちは、平和が永遠であれと祈った。原爆投下は非常に不幸なことだったが、人類を成長させる糧であったのかもしれない。

最後に自分の体験を要約すれば、私は日本人は非常に礼儀正しいと知った。「すみません」、「お願いします」、「ください」、「いらっしゃいませ」等々、日本人は頻繁に口にする。よりよい明日を築くために、今日の若者たちが素晴らしい価値観で育てられ、またそれを十分教えられ、立派な生活のあり方を維持してくれることを願ってやまない。

■アジア

■フィリピン

繋がった輪

ナターシャ・バウティスタ・ヴィズカーラ
（教育グループ）

Ⅰ．母から聞いた日本兵の話

ロサ・ヘンソン、従軍慰安婦

戦時中の日本兵の冷酷な顔

原子爆弾と広島

私が子供の頃から父母、祖父母から聞かされ、長じて本や新聞を読んで抱いていた日本のイメージだ。あまり良いものではない。戦争、死、略奪に関して良いイメージをもつわけがないし、父母や祖父母の世代の体験を知り、彼らの心情を少しでも共有したかったからだ。だから今回プログラムに参加を申し込むにあたり、多少の躊躇がなかったわけではない。私のほかにも私と同じような思いを抱いて参加しているメンバーがいた。その人のお祖父さんは、今でも日本に激しい怒りをもっているという。実際に戦争中日本兵に嫌な思いをさせられた人間が、日本を嫌悪するのは仕方がないことだろう。しかし、母が話してくれた一人の日本兵とのエピソードが、私に日本行きを決心させた。その日本兵は母にたいへん親切で、フィリピン人を苦しめて楽しんでいるような他の日本兵たちと一緒にいることが辛そうな様子だったという。

「ある日、お母さん（あなたにとってはお祖母さんね）とはぐれてしまって、すっかり迷子になってしまったの。そうしたら日本兵が現れて、私を笑わせようといろいろ面白い顔をするのよ。そうして持っていた果物を私に与えて、どこかへ行ってしまったの」。母は話を続けた。「あとであなたのお祖父さんとお祖母さんに叱られたわ。迷子にならないようにって。私が日本兵に会った話をすると、２人ともとても怒ったの。そしてこう言ったの。日本人には絶対近づくな。殺されるかもしれないぞって」

Ⅱ．日本の大学の先生

私は来日するにあたって日本の悪いイメージは忘れることにした。なんといっても私が参加するのは友情計画と名づけられたプログラムであるし、招待を受けながらゲストとして礼を欠いた言動は慎みたいと思ったからだ。また、ジャーナリストという職業柄、私は偏見をもたず客観的に物事を捉えるということが身についているのだ。

講義、視察、日本の若い人々との交流会と、私たちはさまざまなプログラムに参加しそのすべてを楽しんだ。しかし、日本に来て新しくできた友人と談笑しながら、祖父母から聞かされた日本兵と今私の目の前にいる友人が本当に同じ日本人なのだろうかと、私は自問せざるを得なかった。また、日本軍のフィリピン侵略をまったく知らない日本人も多かった。やっかいな話題を避けることができたと安堵する反面、私の気持ちは複雑であった。

しかし、山梨大学を訪れたとき、ついに一人の日本人教授が大戦中のフィリピンと日本について言及した。不幸な比日間の歴史における日本の戦争責任を認め、新しい未来を築くのは私たち若い世代だと彼は言ったのだ。私たちが来日してから既に２週間ほどが過ぎていたが、私は初めてこのときフィリピン人として日本人に迎えられたと感じた。私は比日の未来を思う彼の気持ちに感銘し、あえて日本の戦争責任にまで言及した彼の勇気に感心した。

III．ある男の子

日本ではたくさん新しい友達をつくり、新しい言葉を学び、この美しい国の各地を見て回った。すべて素晴らしい思い出ばかりだが、なかでもある日本の男の子との出会いを私は忘れることができない。ある晴れた日、私たちは葛飾ポニースクールを訪問した。そこで私はユウコという名前の8歳の自閉症の男の子と出会った。自閉症に関しては本で読んだことがある程度で詳しいことは知らなかった。自閉症児は自己の世界に閉じこもり、目先の物事には対処するがあまり深い思考はしないと思っていたのだ。しかしスクールの大野先生のお話では、乗馬を習い始めてからユウコは活発になり症状も改善されて、今では乗馬の準備作業を完全に習得してしまったという。私はユウコと彼の母親の後ろに立ち準備体操をした。そして彼らと一緒にジョギングに出発した。するとユウコは走りながら私の手を握ってきたのだ。私は彼が私を母親と間違えているのだろうと思って、しばらく一緒に走った後、彼を母親のほうに導こうとしたのだが、彼は手を放そうとしない。強く私の手を握り続けているのだ。私はなぜか目に涙が溢れそうになり、ジョギングしながら泣くのも恥ずかしいので、涙を堪えるのに必死であった。私は走るスピードを徐々に上げてゆき、彼が一人で走るように仕向けた。しかし、彼は数秒間一人で走った後私のところに戻って来て、また私の手を握ったのだ。

ほとんど言葉を交わすこともなかったし、互いに相手について何も知らなかったにもかかわらず、ただ手をつないだだけで何故あのときあれほど感動したのか、私は今になってもよく分からない。そして、戦争中まだ幼い少女だった母に優しく接した日本兵は、そのときいったい何を思ってそうしたのであろうかと、思いをめぐらさずにはいられなかった。彼は悲しかったのだろうか。何かを後悔していたのだろうか。それとも、私を完全に信頼して手をつなごうとするユウコに私が感じた何か心を熱くするもの、それと同じものを、自分を見ても逃げもしない少女に日本兵は感じたのだろうか。フィリピンから遠く離れた日本で、私は母との絆を強く感じていた。母と私を結びつける大きな輪が繋がった。

カメラ、桜、そして……

アレクサンダー・アントニオ・V・アベラル
（社会開発グループ）

それは、フィルムを使い切ってほとんどの場面をカメラに収めるというような感じだった。そう、青年招へい事業に参加したフィリピン社会開発グループの私と他の24人にとって、30日間の滞在は日本の全体像を知るのに十分ではなかった。しかし、その期間は、さまざまな経験や知識、新しい友人を得るには十分過ぎる時間だった。この短いエッセーを通して、私たちのもつ日本の印象をなんらかの形で伝えられれば幸いである。

Tで始まる3つの言葉から始めよう。

トイレ(Toilets)。この言葉は、きっと私たちの心に特別な印象を残すだろう。なぜかって？　講義、施設見学、ディスカッションといった忙しいスケジュール中でも、また、空港やレストラン、道路上でさえ生理的欲求が起こっても心配することはなかった。いつも近くに清潔で設備の整ったトイレがあったから。他の国（もちろん自国も含めて）にもこのようなトイレがあるとよいのだが……。

電車(Trains)。日本の近代的な鉄道と電車網に

は目を見張るものがあったが、その運行にはもっと感心した。時間きっかりでとても正確、まるで日本人のようだ。奇妙に思われるかもしれないが、時間に正確な電車を見るといつも時間の大切さを思い出した。時間を守ればより多くのことができるが、遅れればトラブルが起こるということだ。(私は日本滞在の最初の週に電車のドアに押しつぶされそうになったことがある。)

東京(Tokyo)。日本は生活水準が最も高い国のひとつだと言われている。それでも問題がないわけではない。東京はほとんどあらゆる問題をかかえた所である、と私は考えている。素晴らしい建造物のかげに、がらくたを持ったホームレスの人々や非行少年たちがいる。そしてここでは人々はいつも急いでいる。生きるために働くのではなく、働くために生きているようである。このような状況では、人生を楽しむのは容易ではない。

この辺でエッセーを終わりにしよう。自国の仲間たちや日本の友人たちと夜中にホテルの部屋で語り合ったり、短い時間ではあったがホームステイを楽しんだり、疲労困憊するまで(?)招へい青年としての役目を果たしたり、睡眠不足になったり、食べすぎたり、といった日々は、私たちの日本滞在を鮮やかに、また思い出深いものにしてくれた。

最後に一言。1カ月の滞在期間中桜を見ることはほとんどなかったが、ここで得られた思い出と友人たちは、いつも私たちの心の中に咲き続けるだろう。いろいろありがとうございました。

かけがえのない学習

バルゴス・テレシタ・シルマ
(経済Aグループ)

学習する機会は誰にでも平等に開かれている。しかし旅をする機会はわずかの限られた人にしか訪れない。旅を通じて学ぶということはその人の人格さえ変え得る全く新しい機会であり、さまざまな人に出会い人生に対する考え方を広げるだけでなく、その多様性を受け入れる力を与えてくれる。狭い境界壁を越え、今までとは違う人格を形成し得る新しい世界へと誘ってくれる。

1カ月の日本滞在は今までにない新しい経験であった。日本のような先進国がめまぐるしく変化する世界にどのように対処しているかを深く考えさせられた。日本人はその歴史や自然環境を通して私欲を捨て努力するという習慣を身につけてきた。それは日本人それぞれが目標を達成するために迅速で正確、かつ効率的な業務を行い責任をきちんと果たしていることからも明らかである。公共の場での長い行列にさえ混乱は見られず、秩序は維持されている。その規律正しさはまるで日本人の魂に無意識のうちに刻み込まれ受け継がれてきた特質であるかのようだ。

進歩に対する日本の意欲と決意は特に第三世界にとって圧倒的なものである。緻密で厳しい品質管理により生産された電子機器は技術的にも非常に高度なものであり、その精巧さゆえに日本ブランドは信頼と人気を集め国際競争に勝ち抜き日本を経済大国として知らしめた。

一方、日本人の自然に対する愛情や環境保護に

関する認識は地方において特に際立っている。インフラ整備のために自然を開発する際も環境保全に対する配慮を怠らない。生け花や日本庭園をはじめとする伝統芸術、神社や老舗旅館といった建造物のなかにも文化や伝統を重んじ大切にする日本人の心が感じられた。

日本は長年にわたり社会的にも経済的にもさまざまな苦渋を乗り越えてきた。これらの経験を通じ、日本人は多くを学び日本を経済大国として成功に導いた。いくつかの過ちや失敗を犯したことを謙虚に受け止め、それを新たなステップとした。今、アジア・太平洋地域の経済的社会的安定のために重要な任務を果たしつつ、青年招へい事業を実施することにより私たち隣人にその扉を開いてくれている。そろそろ私たち隣人が日本の経験から学び行動をおこす時期なのではないだろうか。

日本、その人々と私

ブアガス・セグフレド
(経済8グループ)

私が日本について聞いたことのある話は、日本がかつて世界を支配しようとしたときに他の国々に荒廃をもたらしたこと、そしてその恐ろしい出来事の生き証人である私たちの両親や祖父母の心と体に、消えることのない苦しみを焼きつけたこと以外にはあまりありませんでした。

戦禍から奇跡的に立ち直り、見事に経済大国への再建を成し遂げた日本に対して、今、私は畏敬の念をもっています。経済復興のおかげで、日本の政府は真に人間的な社会を国民に提供できるようになりました。それは環境破壊や食糧供給について心配する必要がなく、安全な社会です。日本は国民の生活水準を向上させました。それと同時に自然との調和がとれた経済発展を追求していますが、これは多くの途上国が同じように努力して失敗に終わってしまっている問題です。

私は日本の成功の秘密を知るには、過去から現在へつながっている何かを見つければよいと考え、その歴史を詳しく調べてみました。しかしその答えは実際には、駅、地下鉄、アーケード、道路、そして家庭の中にありました。この国の進歩と発展の鍵を握っていたのは日本の人々でした。自分の仕事を愛し、規律正しく、率先して階段の列に並び、ゴミを種類別に分ける、また、約束の時間に遅れないために、きれいな服を着ているのに自転車で駆けつけたりする、それが日本人でした。日本人の価値観や振る舞い方、温かさ、友情、清潔さ、もてなし方、実用主義などの美徳は、手本にする価値があります。また、日本では歴史的な場所や事実を保存しているため、現在の人々がそれを評価し、より良い将来展望をもつことができるのです。

国を超えた友情と相互理解の場をJICAを通して築こうとする日本政府に対し、私は深く感謝しています。このような場を土台としてこそ、皆が求めている世界平和を実現するために私たちは飛び立つことができるのです。そうでなければ、真に人のためになる社会を築くはずの経済発展や繁栄は永遠の幻想に終わってしまうでしょう。

私たちには特別にお礼を述べたい人々がいます。多大な忍耐力をもって私たちの面倒を見てくれたコーディネーターの皆様、自分の時間を割いて私たちの滞在を価値あるものにしてくれたボランティアの方々、日本が抱えている問題について率直に語ってくれた日本の青年の皆様、そして時間とお金を惜しみなく使い、私に家族の愛と温かさを分けてくれたホストファミリーの戸城武史さんと

家族の皆様。私はひとりであったかもしれませが、決して孤独ではありませんでした。

日本での貴重な一瞬一瞬は、いつまでも私の心の中に残り、決して忘れ去られることはないでしょう。日本の思い出は私にとってとても大切な永遠の宝物です。どうもありがとうございました。

日本最前線

バリンバオ・アンナ・デルザ
(農業グループ)

「日出づる国」として知られている日本の地を踏んで、「青年招へい事業」の青年として来日した私は、深い感銘をうけた。素晴らしい景色に恵まれた日本、その国の美しさに思わず息をのんで、私は立ちすくんだ。深い緑の森林、爽やかな草木の匂い、そして自然の景色と結合して一体となったさまざまな色の花、これらの自然に触れ、私は創造主たる神と心を通わせる。

日本のもう一つの面として、速い速度で進んでいく現代の生活があり、そのなかで私は秩序と勤勉さに対する価値を学んだ。

一方、地方と呼ばれている所でさえ、高度な技術を取り入れていることに驚きを覚えた。

また日本人のもつ顕著な特色として、衛生観念が発達していることが挙げられる。どんな所であれ、ゴミを捨てることは禁じられている。

日本人の美学はとても優れているので、素朴なものでさえ非常に人を引きつけるものとなり得る。日本庭園は壮大な寺院を背景にして、入念につくられている。そしてそれは自然の美に貢献するような技法を取り入れていることを映し出している。

日本を今日のようにあらしめたのは、その国の人々である。強い絆の家族をもつという点では、フィリピン人となんの違いもない人々であり、温かい愛情や心配事を分かち合う人々である。そしてまた、アジアだけにとどまらず、世界中で輝いている人々である。

次の詩は私の日本に対するすべての思いを綴ったものである。

ああ、日出づる国よ
この国での思い出は　喜びに満ち溢れる
多くの人々は　礼儀正しく振る舞い
彼らの手にかかる　小さき物は　私を魅了する
急速に成長する経済
折り紙で知られている国
アジアに存在し、中国の東に位置する
トラのごとく強い国
あなたとの永久の友情を願う夢が叶いますよう

日本の大切な思い出

リチャード・ビラリン・カガール
(ASEAN混成 経済2グループ)

JICAによる「青年招へい事業」に参加するのは至難のわざである。私はフィリピンでこのプログラムに応募した2000人のなかから選ばれるという幸運に恵まれた者の一人だ。

日本を訪れたいというのが、学生の頃からの私の夢だった――日本の人々、文化、生活、そして考えを知りたかったし、さまざまな場所を訪ねて

みたかった。その驚くべき巨大な経済や、加速度的な技術革新は私を魅了してやまなかった。このプログラムは、その夢の実現だ。

東京は心に描いていた以上の所であった。まさに文字通りの大都市である。その巨大な空間を歩き回り、迷路のような地下鉄網を乗り継いでゆくのは、コンクリートのジャングルをあてどもなくさまようのに等しい。荘厳な富士山を映す山中湖、上野動物園とその愛すべき住人たち、東京湾の息をのむような景観等。これはほんの一部を挙げただけであり、魅力は尽きない。私のような電子機器マニアにとって、まさにここは聖地である。しかし最も愛すべきは、日本人自身である。彼らの温かさ、親切、そして思いやりの深さは、高度に都市近代化された社会からは想像できないものであった。

福岡に移動してからはもっと真剣な見学となった。私は巨大な経済の世界へいざなわれた。九州エネルギーセンターでは、日本の諸工業をささえる背景を見た。エネルギーである。原子力を含むさまざまな燃料による発電法、そしてその活用法等。また、車をつくるためのすべての製造工程が45分であることに驚かないのであれば、他の何に驚くというのだろうか？　私たちが使っている言葉の真の意味を、あちこちで知らされた。オートメーション、ロボット技術、アセンブルライン、先進技術、R/D(リサーチ＆デベロップメント)、JIT(カンバン方式)、複合企業、生産性、効率化、等。

鹿児島でのホームステイは参加者全員の胸をうった。そこでは日本人家族の日常生活を実際に体験することができた。彼らの心の温かさ、親切さを体験する最良の方法だった。名残惜しくて別れるのがつらかった送別会が、楽しかったホームステイを物語っていた。

広島へと飛行機で飛び、さらに今度は観光を楽しむことができた。平和記念公園、平和記念資料館には、全世界への警鐘が保存されていた。原子力を創造のためではなく破壊のために使用するという間違いを決して繰り返してはいけないと。じっくり反省し考えてみるべきこの問題にひとまず区切りをつけるために、神々しい宮島への観光へと誘われた。そして、私たちの頭がいっぱいになり、現在のことも未来のことも考えられなくなってきたとき、親切な私たちの後援者はもっと精神的な、また保守的で伝統的な文化に浸れる場所へ連れて行ってくれた。何百年という歴史を誇る社寺が多数ある京都の観光はその目的には最適の場所である。過去の栄光を偲ばせる神社の荘厳さは心をいやしてくれた。

思い起こせば貴重な経験だった。これらのことは、円でもペソでも、ドルでも、ルピーでも、バーツでも、そしてリンギットでも換算できない貴い体験であった。この紙面をお借りして、私どもの後援者(JICA、青少年育成国民会議、九州・山口経済連合会)、日本人青年の皆様(学生および企業人)、私たちが訪問した官庁および私企業の担当者の皆様に心からお礼を申し上げたい。そして、たいへんお世話になったコーディネーターの青木みゆきさん、長谷川千秋さん、小林紀子さんに特別の感謝をしたい。

これまで述べてきたすべてが、このプログラムに掲げられた目標である相互理解と永続する友情の確立に貢献したと信じる。さまざまな知識が共有され交換された。多くのことを学んだ。このことが友人のより良い理解、そして彼らの国のより良い理解に役立った。私たちはそれぞれ考え方や信条や行動法が違う。しかし、ひとたび話し合って考え方や情報を交換してみると、すぐに多くの共通点があることに気がつく。私は、「多様性を尊重した調和」の発展こそ真の友情の基礎だと思う。それが、言葉の壁さえ取り払ってくれる友情だと信じる。21世紀へ、そしてさらに未来へと培われる友情だ、と。

日本とASEAN諸国にマブハイ！(栄えあれ！)